

「マキアヴェリ」の神(2)

—『マルタ島のユダヤ人』における反カトリック主義—

‘Machevill’'s God:
Anti-Catholicism in *The Jew of Malta* (2)

森 ゆかり[†]
Yukari MORI

Abstract Over the four centuries of critical traditions on Christopher Marlowe's *The Jew of Malta*(1592), the main instigator of the play, Barabas, a Sephardic Jew, was considered to be an arch-Machiavellian villain, together with Shylock, an Ashkenazic counterpart in Shakespeare's *The Merchant of Venice*. Another widely accepted critical tradition told us that both Barabas and Shylock were the focuses of the anti-Semitic prejudices projected onto the Elizabethan dramas. In this paper, I will refute those two propositions and support Stanic's (2013) view that the real Machiavellian schemer in *The Jew of Malta* is Ferneze, the Roman Catholic Governor of Malta. I will demonstrate that Marlowe used an equivocating casuist, Barabas to caricature the Elizabethan church-papists, who outwardly conformed to the official Church of England but internally gave their pledges to the Roman Catholic Church. After comparing the anti-Catholic to anti-Islamic prejudices recorded in the Mediterranean captivity narratives around the same period, I will argue that through the persona of 'Machavill' staged in the Prologue of *The Jew of Malta*, the anti-Catholicism in *The Jew of Malta* paves the way to his next work, *The Massacre at Paris*, a controversial drama with highly anti-Catholic overtones.

4. 地中海捕囚記

—げに恐ろしきはオスマン・イスラム教徒ではなく—

さてマーローのイスラム教徒観を考察する前に一度、エリザベス女王治下のイングランドにおける対イスラム関係史を概観しておこう。

エリザベス1世は、オスマン・モロッコと交易・外交関係の構築に尽力して、ロンドンにイスラム教国の大使を招いた最初のイングランド君主である。¹⁾英国は既に1511年よりオスマン・レパント交易を開始していたが、²⁾1581年にはトルコ会社(1592年にレパント会社と改名)、1585年にはバーバリ会社、1600年には東インド会社を設立して、³⁾英国がオリエントに

進出する拠点とした。オスマン帝国は1529年にウィーン、1566年にはマルタ島を侵攻した後、16世紀後半になるとその勢力が衰退する傾向にあったというが、⁴⁾フランス、スペインというヨーロッパのカトリック大国と対立するエリザベスは柔軟な外交政策をとり、東地中海との直接交易を推進するためにも、モロッコ国王 al-Mansur とその後継者である Abd al-Malik、オスマン皇帝 Murad III とその皇后 Safiye、息子の Mehmed III と積極的に接触した。⁵⁾ エリザベスはスペイン無敵艦隊の脅威に晒されるとオスマン皇帝 Murad III に軍事援助を要請し、⁶⁾また一方、1588年夏、エリザベスがスペインの無敵艦隊撃破に成功すると、モロッコ国王 al-Mansur も英国を軍事・外交上の同盟国として認識し始め、同年末には、スペインに対抗する英国・ポルトガ

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

ル同盟に参加することになる。⁷⁾ 17世紀には、イギリスがヨーロッパで最大のイスラム貿易相手国となったのである。⁸⁾

以上は、対イスラム外交史の概観だが、マーローが生きたエリザベス時代、一般の人々が持つイスラム教徒観とは一体どんなものだったのだろうか。MacLean と Matar の共同研究によれば、エリザベス治世になると、イスラム教徒やキリスト教徒の海賊によって捕虜とされる英国人が増加したが、捕囚の大部分は地中海地域で発生しており、アナトリア、ペルシャ、インドでは僅かしかなかったという。北アフリカの捕囚記は1580年代から19世紀まで定期的に刊行されており、英国においては、辛くも故郷に帰還できた地中海捕囚者の体験談が、対イスラム観を大きく影響したという。⁹⁾ 英国最初の地中海捕囚記は Richard Hakluyt の *Principal Navigations* (1589) に所収されたものだが、¹⁰⁾ Edward Webb の *Rare and most wonderful things* (1590) は、当時非常に人気が高く、版を重ねたという。¹¹⁾

この Webb の捕囚記で注目すべきなのは、プロテスタントの Webb が、捕囚中、オスマン・トルコの主人に仕えるよりも、カトリック国ナポリで捕囚される方がはるかに恐ろしい経験だったと証言している点である。少なくともエリザベス時代には、異教徒のイスラム教徒による捕囚より、同じキリスト教徒のローマ・カトリック教徒による捕囚の方が、プロテスタント英国人にとって過酷で恐怖の対象となるのだ。¹²⁾ この二つの捕囚記は、マーローが丁度『マルタ島のユダヤ人』を執筆している頃に出版されて評判になったものなので、マーローも実際に取って見る機会があったかもしれない。

Matar によれば、イスラム教徒とローマ・カトリック教徒で、捕囚者への待遇が相違する原因として、イスラム教徒は支配領域内に居住するキリスト教徒もしくはユダヤ教徒を改宗させように関心を持つ一方で、ヨーロッパのキリスト教徒、特に捕囚者をイスラム教徒に改宗させることにはあまり関心を払わなかったことを挙げている。地中海地域で拿捕したキリスト教徒捕囚者は、イスラム教に改宗させずにおけば、キリスト教徒から多額の身代金を得たり、キリスト教圏に捕囚されている他のイスラム教徒と交換できる上、ガレー船の漕ぎ手として使うこともできるのに対し、イスラム教に改宗させてしまえば、上記の用途に使えないという事情もあったらしい。¹³⁾

Webb の捕囚記の後、1595年に出版されたのが Richard Hasleton の *Strange and Wonderful Things Happened to Richard Hasleton... in His Ten Year's Travails in Many Foreign Countries* である。これは15

82年から1593年に及ぶ Hasleton のアルジェ、パルマ、マジョルカにおける捕囚記で、マーローの没後に帰国し捕囚記を出版しているのが、マーローが直接これを手にした訳ではないが、ここでもまた Webb の捕囚記と同様、トルコのガレー船奴隷の境遇よりローマ・カトリック異端審問所の改宗強制のほうがはるかに恐ろしいと記している。Hasleton は、ローマ・カトリック教徒が拷問によって改宗を迫るのに対し、イスラム教徒は経済的利得とイスラム教徒の妻と引き換えに改宗を勧めると記録しており、地中海で捕囚されたプロテスタントにとって、やはりイスラム教徒よりスペイン人のほうがはるかに邪悪で恐ろしい存在だと証言する。¹⁴⁾

こうした捕囚記は、大半の捕囚帰還者が教育を受けていないため、編集者が彼らの証言をもとに、古典やラテン語の引用等を挿入して出版されたものである。¹⁵⁾ 英国国教徒とプロテスタント非国教徒の双方が、こうした捕囚記を使って、イスラム・オスマン帝国とヨーロッパのローマ・カトリック諸国を比較し、反カトリック・プロパガンダに利用した。イスラム教徒は非イスラム教徒にある程度の信教の自由を認めるのに対して、カトリック・ハプスブルクはこれを認めず、非寛容政策を採っていたからである。¹⁶⁾

Hasleton の捕囚記は現在リプリントでも入手でき、マーロー没後のものではあるが、当時の反カトリック感情がよく反映されているので、もう少し具体的にその内容を見てみよう。ルター派の英国人¹⁷⁾ だった Hasleton の捕囚は、1582年7月にスペイン Almeria 近くの Cape de Gatte でトルコ船から攻撃されたことに始まる。Argier で奴隷として売却され、ガレー船の漕ぎ手として過酷な労働を強いられたが、イビザの南、Fermonterra で嵐に遭い難破、ジェノバのガレー船に収監されてマジョルカ管轄のイビザに送還される。スペイン国王とローマ・カトリック教会に反する言動がなかったかどうかをマジョリカの異端審問所での審理の後、ジェノバに送還、聖像を崇敬するよう命令されて拒絶したため、ローマ・カトリック教会の名によって宣誓しなければ火刑にされると脅迫されたという。¹⁸⁾ Hasleton はこう記す。

Then I asked him why he kept me so long in prison, which never committed offense to them (knowing very well that I had been captive in Argier near five year's space), saying that when God, by his merciful providence, had through many great dangers set me in a Christian country and delivered me from the cruelty of the Turks, when I thought to find such favor as one Christian oweth to another, I found them

now more cruel than the Turks, not knowing any cause why. "The cause," said he, "is because the king hath wars with the queen of England" (for at that instant there was their army prepared ready to go for England).¹⁹⁾

アルジェで5年間も捕囚され、神の慈悲深い摂理によって、多くの艱難に遭遇しながらもキリスト教国に辿り着き、やっとトルコ人の残虐さから解放されたと思いきや、同じキリスト教徒のスペイン人からは、トルコ人よりもさらに過酷な仕打ちを受けるはめになったと **Hasleton** は嘆息する。当時スペインがエリザベスと交戦状態にあったからである。

光の当たらない地下牢で1年、パンと水で過ごした後、1588年5月1日に脱走したが失敗、マジョリカの異端審問所に再送還され rack (拷問台のこと、その上に人を寝かせ、手足を反対方向に引っ張って関節をはずすもの。なお公平を期すために一言加えると、英国政府当局も当時、国内ローマ・カトリック司祭、信徒に対してこれを使用していた。)と水攻めの拷問を受け、マジョルカの町を鞭打ちされて引き回されたという²⁰⁾。再度脱走を試み、肩まで水につかりながら追っ手が過ぎるのを待つて脱走成功、途中出会ったムーア人は、**Hasleton** の惨めな姿を哀れんで、「トルコのイスラム教徒というよりは、キリスト教徒のように」介抱し、食事を与えたという。

²¹⁾ トルコのイスラム教徒の方が、スペインのカトリックより、はるかに福音的であると言わんばかりである。(言っているが。)遁走途中で御用商人に遭遇したことから、**Argier** 国王に謁見、出世を約束するのでイスラム教徒にならないかと勧められるが断り、その後国王から示された、改宗して自分に仕えれば出世もさせ故国にも帰国できるとの提案も、年収50ポンドを支給し、好きな女を妻にしてよいという提案も断り、3年間ガレー船奴隷として過ごした後、1592年12月23日英国行きの船に乗り、1593年2月に帰国したという。²²⁾

以上が、当時の地中海捕囚記に見られる、反カトリック言説であるが、では一体、マーローのイスラム教徒観は、どんなものだったのだろうか。**Honan** も認めていることだが、マーローは、『マルタ島のユダヤ人』で、キリスト教徒(本作品にはプロテスタントが登場しないため、キリスト教徒イコール、ローマ・カトリック教徒となる)には払わない敬意をトルコ人とユダヤ人に払っているという。バラバスを除けば、本作品で、領土や金銭をめぐる争いに関係していないのは、その娘アビゲールと、マルタ島在住のバラバス以外のユダヤ人である。²³⁾他方、『マルタ島のユダヤ人』に登場するトルコ人も腐敗して

おらず、プロットの後半、カリマスらトルコ人たちはバラバスをあまりにも信頼しすぎて失敗する。マルタ島の総督であるファーニーズがバラバスとユダヤ人共同体から徴収し、本来ならばトルコに支払われるべき年貢は、結局、カトリックの術策家ファーニーズによって没収され、マルタの支配権をも奪われてしまったからである。²⁴⁾

本セクションで考察したエリザベス時代の地中海捕囚記に共通して見られる、「トルコのイスラム教徒の方が、ローマ・カトリック教徒よりはるかにまし」、という見解は、長期にわたる過酷な捕囚を耐え抜いて、奇跡的でセンセーショナルな帰還を果たしたプロテスタントの英国人捕囚者の生の証言を通して、当時の人々に熱狂的に受け入れられたに違いない。前述の通り、英国政府、英国国教会聖職者たちにとっても、こうした彼らの証言は反カトリック・プロパガンダに有利なものだったはずであるし、これら彼ら当局者も、これら捕囚者が持つプロパガンダ上の価値を、最大限に利用したはずである。異教徒のオスマン・イスラム教徒よりも、はるかに残虐非道で陰謀術策に長けているのはローマ・カトリック教徒であるという見解は、『マルタ島のユダヤ人』においても、二人の異教徒一すなわちユダヤ人バラバスと、トルコのカリマスーを遥かに凌ぐ「マキアヴェリ」主義者、ローマ・カトリック教徒のファーニーズがプロット上果たす役まわりの点からも、期を一にし、エリザベス時代当時の諸宗教観とは、さほど大きく食い違うものではなかったはずである。

マーローの反カトリック主義を形成するにあたっては、彼の伝記的事実も大きな役割を果たしているはずだ。セクション3でも解説した通り、マーローは対カトリック工作のスパイとして学生時代からフランス、ネーデルランド等で諜報活動をしていた。—それも二重スパイすれすれのところで—。遠くの「ユダヤ人」よりは、裏切り、裏切られ、寝首を搔かれる、近くの「ローマ・カトリック教徒」に対してマーローの怒りが向けられていたに違いない。マーローの足取りを辿ってみよう。

1589年9月8日、親友の **Thomas Watson** のために決闘し、決闘相手を殺害してしまった事件²⁵⁾のために、マーローは、ワトソンとともにニューゲート監獄に収監、その際、チェシャー出身の **John Poole** に出会ったとされる。**Poole** は、急進派のカトリックで、海外在住カトリックのために偽造貨幣の鑄造をしていた男である。²⁶⁾当時英国カトリック教徒は、英国から海外に送金することを禁止されており、長期にわたるヨーロッパ大陸での亡命生活で、資金繰りに悩む英国カトリック教徒が多数いたからである。マーローは、1592年1月初旬、南ネ

ーデルランドの Flushing に向けて出発し情報活動をするのだが、マーローは賈金と引き換えにカトリックから情報を得ようとしたらしい。Flushing では、賈金造りの Gifford Gilbert と、件の Richard Baines の3人で部屋を間借りしていたようである。Baines は、先述した Rheims の毒殺計画の失敗で、フランスではスパイとして使いものにならなくなったために、今度はフランドルで活動を続けていたらしい。ローマ・カトリック司祭に叙階され、日々ミサを挙げながらも、Rheims の英国学寮内部で騒乱を企て、学寮の井戸に毒薬を投げ込もうと計画していたこの男に、「マキアヴェリの生地で学んだ」術策で、「はだしの修道士のようにペコペコ腰をかかめておいて」、「心のなかではクリスチャン（ローマ・カトリック教徒と言い換えるべきか）どもが（飢え）死にするのを」願う、バラバスの姿を重ねることは想像しすぎだろうか。

この Baines に裏切られ、1592年1月26日マーローは当局に告発されることになる。²⁷⁾マーローと Gilbert は、Flushing 知事により逮捕、本国送還処分となる。幸いお咎めはなかったものの、面が割れてしまったマーローは、以降スパイとして活動する可能性を完全に断たれ、帰国後は経済的にも困窮することになるのだ。²⁸⁾マーロー殺害事件にもこの男の影がちらちらするが、今となっては真相も永遠に闇の中だ。マーローが『マルタ島のユダヤ人』を執筆していた頃にはまだ、この男がこの先、自分の人生に暗く大きな影を落とすことになるとは、マーロー自身も知る由もない。

マーローの次作品であり反カトリック色が濃厚な『パリの虐殺』は、1593年1月30日にローズ座で初演されたが、²⁹⁾ 作品の構想は彼が Flushing に滞在していた頃ではないかと想定されている。³⁰⁾マーローの作品を解釈する上で、『マルタ島のユダヤ人』の反ユダヤ主義から、一転、次作『パリの虐殺』で反カトリック主義へと移行したと考え、モチーフを分断してしまうよりも、『マルタ島のユダヤ人』が、そもそも反ユダヤ言説を借りた反カトリック言説であると解釈することで、そのものずばりの反カトリック言説である『パリの虐殺』へと、マーローの作品を一貫して捉えることができるのではないだろうか。『マルタ島のユダヤ人』を『パリの虐殺』のプロローグとして解釈することができるのである。

5. 終わりに

マキアヴェッリの神と「マキアヴェリ」の神

ここまで、マーローが『マルタ島のユダヤ人』のプロローグで、「マキアヴェリ」自身を登場させ、ユダヤ人バラバスではなく、聖パーソロミューの虐殺を指揮したとさ

れるローマ・カトリック教徒のギーズ公アンリに「マキアヴェリ」の魂が乗り移ったと告白しているのを確認した上で、1)『マルタ島のユダヤ人』のプロット展開上、ユダヤ人バラバスよりも、ローマ・カトリック教徒のマルタ島総督、ファーニーズの方が、残虐非道で術策に富む「マキアヴェリ」主義者の典型であること、2)ユダヤ人バラバスが娘のアビゲールもろとも女子修道会共同体を毒殺したプロットは、Rheims の英国学寮で、ローマ・カトリック司祭でありながら英国政府側のスパイをしていた Baines が起こした実際の事件がモデルになっており、ローマ・カトリック教徒もユダヤ人も、修道院共同体全員を毒殺しようとした点で共通すること、3)身体・財産・生命を脅かす宗教的迫害を逃れるために、宗教上の二重忠誠を強制される異教徒ユダヤ人と、イングランドのローマ・カトリック教徒は、「多義の虚偽」や「心裡留保」を使って自らの身を守る必要があり、『マルタ島のユダヤ人』では、ローマ・カトリック教徒が使用するとされていた、これらの「詭弁」を舞台でバラバスに意図的に模倣させて、ローマ・カトリック教徒を風刺していること、4)当時評判になった地中海捕囚者の証言では、イスラム教徒よりローマ・カトリック教徒のほうが残酷であるとされていること、5)マーローは個人的にも、ローマ・カトリック教徒の Baines 等に対し私怨があったこと、以上5つを見てきた。

エリザベス時代の反カトリック・プロパガンダは、異教徒ユダヤ人やイスラム教徒よりむしろ、ローマ・カトリック教徒の方が、「宗教など子供のおもちゃにすぎぬ」と軽視し、「多義の虚偽」や「心裡留保」を使って「いつわりの信仰告白を堂々と」行い、目的のためには手段を選ばない「マキアヴェリ」的冷酷さで、勢力拡大のために権謀術策を駆使する、神なき存在であると民衆を煽ってきたのだ。

さて最後に、『マルタ島のユダヤ人』プロローグに登場する「マキアヴェリ」でだけではなく、フィレンツェの政治思想家、ニコロ・マキアヴェッリにも、本当に神はいなかったのか検討してみよう。

死の床にあって、「死んだら聖人と共に天国にいるよりは、古代の偉人とともに永遠に地獄で過ごしたい」言ったとされ、³¹⁾無神論者のように言われるニコロ・マキアヴェッリだが、彼は無神論者でないというのが Viroli の主張だ。確かにマキアヴェッリの神は、キリスト教の摂理の神とも異なるし、³²⁾創造主であり、また人類史に終止符を打ち、善人に永遠の命を与える神でもない。³³⁾

マキアヴェッリのキリスト教批判を以下に引用してみよう。

今日我々の信奉する宗教は、行動的な人間よりは、目立たない瞑想的な人物を持ち上げる傾向がある。その上現代の宗教は、服従、謙遜を最も貴いことと考えて、人間が対処しなければならない日常の事柄をさげすむ。これに対して、古代の宗教は強靱な精神、頑健な肉体、さらにこの他人間をこの上もなく力強い存在に鍛え上げるすべての事柄を最高の善とみなしていた。ところで、現代の宗教が我々にたくましくあれと要求する場合、何か大事業をやれと言っているのではなくて、忍従できるような人間になれ、と言っているのである。このような生き方が広がっていくにつれて、世の中はますます懦弱となって、極悪非道な連中の好餌にならざるをえない。この連中こそが、世の中をいのように牛耳ってしまうようになる。³⁴⁾

マキアヴェッリにとって信仰とは、上記のように古典古代の強靱な精神と肉体、大事業をなす力強さに基づく「活動的」なもので、ただ何もせず神の恵みを信じて待ち、じっと不幸を耐え忍ぶだけの「観想的」で受け身な中世的信心ではなかった。マキアヴェッリは、こうした中世的信心をする者を、古代末期の異端、アリウス派の誤謬に惑わされた人々に例え、「限りない災厄に耐えたのみならず、惨めな人々すべてが救いを求める神からの救済も、受けることができず、どの神に救いをもとめたらよいかわからずに、救いも希望もまったくなく、悲惨なままに死んでいった」³⁵⁾と言って憐れむのだ。マキアヴェッリはこうした受動的なカトリック信仰を否定するのであって、キリスト教自体を否定する訳ではないことは、以下の引用を見れば明らかだ。

もしキリスト教がキリスト教国の支配者の手で、その設立者によって授けられたままの姿を維持されていたなら、今日のキリスト教諸国家は、現在よりももっとまとまりのある、はるかに幸せなものになっていたであろう。キリスト教の教皇の座であるローマ教会のすぐそばに住む人びとが、これといった宗教心を持ちあわせていない現実に勝るキリスト教の墮落を推測させるものはあるまい。³⁶⁾

では、マキアヴェッリにとって「設立者によって授けられたままの姿」の信仰とはどういうものなのだろうか。Viroli は、マキアヴェッリの著作、*Esortazione alla penitenza* を引用して、マキアヴェッリのキリスト教信仰は、*caritas* に基づき、この *caritas* から市民が守るべき倫理原則が導き出されるのだという。³⁷⁾この *caritas*こそが、マキアヴェッリにとって祖国愛の核心であり、

³⁸⁾マキアヴェッリにとっての神とは、祖国と自由を愛するよう教えて、これを倫理的・宗教的改革の根本原理とするものであったのである。³⁹⁾マキアヴェッリは、私利私欲のために権謀術策を弄することを承認したのでは決してなく、全ては彼が愛する祖国フィレンツェの自由のためだったのだ。したがって、マキアヴェッリは私利私欲のための権謀術策について以下のように述べている。

どのような人間が国家にとってより有害であるか、すなわち獲得しようとあせっている人間と、いったん獲得したものを手放すまいとしがみついた人間と、どちらが手に負えない存在か、という例の論題に立ち戻ることにしよう。…騒動を一番多く引き起こすのは、持てる側のように思われる。何かを失いそうだとする恐れが、新たに物を手に入れようとする人びとの抱く欲望と、寸分たがわぬ結果を生み出すからだ。これは、人間というものが、さらに新しい物が獲得できる保証がないと、物を持っている安心感にひたれないことによるのである。こうして、さらに新しく獲得した物が増えてくると、ますます大きな権力と行動力をもつようになる。そしてさらに、それによって世の中に改変を加えることが可能となってくる。放縦で野心的な彼らの言動は、さらに悪いことには、何かを得ようと焦る持たざる者の心中に怒りの火をつける。⁴⁰⁾

マキアヴェッリにとって神は存在したかもしれないが、『マルタ島のユダヤ人』プロローグに登場する「マキアヴェッリ」に神は存在しない。あるのは私利私欲のみだったのだ。

(注)

- 1) MacLean and Matar, 1.
- 2) MacLean and Matar, 17.
- 3) MacLean and Matar, 2.
- 4) MacLean and Matar, 6.
- 5) MacLean and Matar, 43-49. Matar, 123.
- 6) Matar, 123.
- 7) MacLean and Matar, 52-53.
- 8) Matar, 10.
- 9) MacLean and Matar, 126-127.
- 10) MacLean and Matar, 128.
- 11) MacLean and Matar, 134.
- 12) MacLean and Matar, 134-135.
- 13) Matar, 32. 地中海領域とは別に、中欧でも、16

世紀に侵攻してきたオスマン・トルコが中欧のプロテスタントに対し限定的な宗教的寛容を認めたのに対し、ローマ・カトリックのハプスブルク家は、これを厳しく弾圧した。Matar, 138.

- 14) Vitkus, 71-72.
- 15) MacLean and Matar, 127.
- 16) Matar, 106.
- 17) Vitkus, 76.
- 18) Vitkus, 74-79.
- 19) Vitkus, 79-80.
- 20) Vitkus, 80-85.
- 21) Vitkus, 86-88.
- 22) Vitkus, 88-95.
- 23) Honan, 253.
- 24) Honan, 260.
- 25) Honan, 225-226.
- 26) Honan, 229.
- 27) Honan, 266-271, 278.
- 28) Honan, 278-286, 288.
- 29) Honan, 277.
- 30) Honan, 272
- 31) Viroli, 27.
- 32) Viroli, 33.
- 33) Viroli, 40.
- 34) 『ディスコルシ』 II.ii. 永井訳、287-288.
- 35) 『フィレンツェ史』 I.v. 斎藤訳、(上) 38.
- 36) 『ディスコルシ』 I.xii. 永井訳、86.
- 37) Viroli, 67.
- 38) Viroli, 68.
- 39) Viroli, 86.
- 40) 『ディスコルシ』 I.v. 永井訳、47-48.

引用文献

- Arbel, Benjamin. *Trading Nations: Jews and Venetians in the Early Modern Eastern Mediterranean*. Leiden: E.J. Brill, 1995. Print.
- Bonfil, Rorbert. *Jewish Life in Renaissance Italy*. Translated by Anthony Oldcorn. Berkeley: University of California Press, 1994. Print.
- Brenner, Robert. *Merchants and Revolution: Commercial Change, Political Conflict, and London's Overseas Traders, 1550-1653*. London: Verso, 2003. Print.
- Brotton, Jerry. *The Renaissance Bazaar: From the Silk Road to Michelangelo*. Oxford: Oxford University Press, 2002. Print.
- Carlebach, Elishea. *Palaces of Time: Jewish Calendar and Culture in Early Modern Europe*. Cambridge, MA: The Belknap Press of Harvard University Press, 2011. Print.
- Carroll, Stuart. *Martyrs & Murderers: The Guise Family and the Making of Europe*. Oxford: Oxford University Press, 2009. Print.
- Cohen, Mark R. *Under Crescent and Cross: The Jews in the Middle Ages*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1994. Print.
- Davis, Robert E. and Benjamin Ravid eds. *The Jews of Early Modern Venice*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001. Print.
- Donne, John. *Ignatius His Conclave*. T.S. Healy ed. Oxford: Clarendon Press, 1969. Print.
- Dursteler, Eric R. *Venetians in Constantinople: Nation, Identity and Coexistence in Early Modern Mediterranean*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 2006. Print.
- Holms, Peter. Ed. *Caroline Casuistry: The Cases of Conscience of Fr Thomas Southwell SJ*. Catholic Record Society Publications Records Series Volume 84. Woodbridge: Boydell Press, 2012. Print.
- Honan, Park. *Christopher Marlowe: Poet & Spy*. Oxford: Oxford University Press, 2007. Print.
- Holt, Mack P. *The French Wars of Religion, 1562-1629*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press, 2005. Print.
- Jardine, Lisa. *Worldly Goods*. Basingstoke: MacMillan, 1996. Print.
- Katz, David. *The Jews in the History of England, 1485-1850*. Oxford: Clarendon Press, 1996. Print.
- Kir, Ian. *John Henry Newman: A Biography*. Oxford: Oxford University Press, 1988. Print.
- 小岸 昭『マラーノの系譜』東京：みすず書房、1998年
- マキアヴェリ『君主論』池田 廉訳 東京：中央公論新社、2002年
- 『ディスコルシ ―「ローマ史論」―』永井三明訳 東京：筑摩書房、2011年
- 『フィレンツェ史 (上)(下)』斎藤寛海訳 東京：岩波書店、2012年

- MacLean, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford: Oxford University Press, 2011. Print.
- Marlowe, Christopher. *The Jew of Malta*. Ed. James R. Simeon. (New Mermaids) London: Methuen Publishing, 2009. Print.
- R クリストファー・マーロー 『マルタ島のユダヤ人・フォースタス博士』 小田島雄志訳 東京：白水社、1995年
- Matar, Nabil. *Islam in Britain, 1558-1685*. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. Print.
- Newman, John Henry. *Apologia Pro Vita Sua: Being a History of his Religious Opinions*. Martin J. Svaglic ed. Oxford: Oxford University Press, 1967. Print.
- Nicholl, Charles. *The Reckoning: The Murder of Christopher Marlowe*. London: Vintage, 2002.
- Peck, Linda Levy. *Consuming Splendor: Society and Culture in Seventeenth-Century England*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005. Print.
- Petrina, Alessandra. "Reginald Pole and the Reception of the *Principe* in Henrician England." *Machiavellian Encounters in Tudor and Stuart England: Literary and Political Influences*. Eds. Alessandro Arienzo and Alessandra Petrina. Farnham: Ashgate, 2013. pp.13-27. Print.
- Petrina, Alessandra and Alessandro Arienzo. "Introducing Machiavelli in Tudor and Stuart England." *Machiavellian Encounters in Tudor and Stuart England: Literary and Political Influences*. Eds. Alessandro Arienzo and Alessandra Petrina. Farnham: Ashgate, 2013. pp.1-11. Print.
- Raab, Felix. *The English Face of Machiavelli: A Changing Interpretation 1500-1700*. London: Routledge, 2010. Print.
- Rose, Elliot. *Cases of Conscience: Alternatives Open to Recusants and Puritans under Elizabeth I and James I*. Cambridge: Cambridge University Press, 2008. pp. 1-113. Print.
- Ruderman, David B. *Early Modern Jewry: A New Cultural History*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2010. Print.
- Smith, Pamela H. and Paula Findlen eds. *Merchants and Marvels: Commerce, Science and Art in Early Modern Europe*. New York: Routledge, 2002. Print.
- Stanic, Enrico. "Machiavellianism in Christopher Marlowe's *The Jew of Malta*." *Machiavellian Encounters in Tudor and Stuart England: Literary and Political Influences*. Eds. Alessandro Arienzo and Alessandra Petrina. Farnham: Ashgate, 2013. pp.75-88. Print.
- Viroli, Maurizio. *Machiavelli's God*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2010. Print.
- 森 ゆかり "「Truth for its own Sake」 シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』における反カトリシズム (1) (2)" 愛知工業大学研究報告 No. 33(1998): 51-72.
- 森 ゆかり "ジョン・ダン『イグナチウスの秘密会議』における公会議主義 (1) (2)" 愛知工業大学研究報告 No. 39 (2004): 13-31.
- Vitkus, Daniel J. and Nabil Matar ed. *Piracy, Slavery and Redemption: English Captivity Narratives in North Africa, 1577-1704*. New York: Columbia University Press, 2001. Print.
- Walsham, Alexandra. *Church Papist: Catholicism, Conformity and Confessional Polemic in Early Modern England*. Woodbridge: Boydell and Brewer, 1993. Print.

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)